

◆主な「手元供養」商品

商品名	①ソウルジュエリー	②ミニ骨壺 蒔絵「春秋流水」	③メモリアル ペンダント フォーエバー	④メモリアル・ ダイヤモンド
特徴	ペンダントトップに少量の遺灰を納められる。素材はシルバーやプラチナなど。写真はシルバーの「オープンハート」(1万7220円)	遺灰や遺品を納め、自宅に置く。伝統技法の本金蒔絵(ほんきんまきえ)で、1万8900円。ほかに、真鍮(しんちゅう)製や有田焼のミニ骨壺(こつつぼ)もある	ケースに遺骨や遺髪を納められる。素材は、長年使っても変色せずさびないチタンを使用。故人の名前などを有料で刻印できる。1万9800円	遺骨の炭素成分から生成するダイヤモンド。カットされたダイヤの製作料は39万9000円(0.2カラット)から。ペンダントや指輪にする場合、別に加工料がかかる
販売元 問い合わせ	メモリアルアートの大野屋 (0120-02-8888)		ボンズコネクト (06-7657-2739)	アルゴダンザ・ジャパン (0120-253-940)

故人の遺骨や遺灰を肌身離さず持っていたい、という人たちの間で「手元供養」が静かに広がっているという。遺灰を入れて首に下げるペンダントなど、日常生活を送る際にも違和感のないグッズが増えている。

(経済部 滝沢聡)

墓石や仏具を販売する「メモリアルアートの大野屋」によると、手元供養の商品は「お墓が遠方で墓参りが頻繁にできない人や、

自宅に仏壇を置くスペースがない人に急速に広がっている」。40歳代以上の人が亡くなった親の遺灰を手元に置く例が多いという。

遺灰ペンダントいつも一緒

身に着けるものとしては、ペンダントタイプが一般的で、ペンダントトップの中に少量の遺灰を納められる。墓に納骨する前、遺灰の一部を自分でペンダントに入れる。最近ではインターネットで直接、買う人も増えているという。

表①はシルバーのほかプラチナや18金のタイプもある。デザインも300種類超もあり、一番人気は写真の「オープンハート」だ。

③は耐久性が高いチタン製。「一生、身に着けていたいという遺族の声に応えた」(ボンズコネクトの中村政幸社長)という。

遺骨から人工ダイヤモンドを作り、アクセサリーに加工するサービスもある。

④は、遺骨に含まれる炭素成分から、合成ダイヤモンドを生成する。販売元が遺骨の一部を引き取ってスイスで製作、製作期間は平均で半年程度かかる。依頼者の9割が女性で、「若くして夫を亡くした人などに求められている」(アルゴダンザ・ジャパンの法月雅喜社長)という。

遺灰や遺品などを納める小型の骨つぼも手元供養用に販売されている。仏壇がなくても、さりげなく部屋に置いて供養できる。